

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 31 日現在

機関番号：32643

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24531020

研究課題名(和文) 専門職としての保育者養成の課題 養成の4年制大学化と実践知の理論化を中心として

研究課題名(英文) Problems of the universities' systems to train nursery and kindergarten teachers - Focusing on the 4-year programs and theorization of practical knowledge of teachers.

研究代表者

杉本 真理子 (Sugimoto, Mariko)

帝京大学・教育学部・教授

研究者番号：70130010

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)： 保育者養成史資料の検討、保育現場管理職対象の養成校への要請に関する質問紙調査、学生および保育者対象のジェンダー観とライフ・ワーク・バランスに関する質問紙調査、保育記録の分析、保育者養成課程の授業分析、保育学生の継続的子どもイメージ調査等を実施した。

近年、保育者養成への4年制大学の参入が急増しており、授業内容と方法には工夫が見られ、学生の4年間の成長は確認できたが、社会の保育者の専門性や待遇に関する認識は明治期以来低いままである。急激な社会変化に伴う保育ニーズの多様化や困難さに対応できる高い専門性を備えた保育者養成が必要であり、保育者の専門性の正当な評価と待遇の改善が早急に望まれる。

研究成果の概要(英文)： We will explore our research including: examination of the history of nursery teacher training, a questionnaire of nursery school administrators' needs of training programs in universities, a questionnaire exploring gender roles and life-work balance of teachers, analysis of nursery school childcare records, analysis of university childcare classes, and continuous research of students' image of young children.

Recently, there has been a rapid increase in nursery teacher training programs offered by universities. There is confirmed improvement in curriculum and student development. Public understanding of the specialty of nursery teachers remains low since the Meiji era, and working conditions have not improved. As it is necessary to provide highly specialized training for nursery teachers, to support diversification and the difficulty of childcare, social change including fair evaluation of the specialty and improvement of working conditions is urgently needed.

研究分野：発達心理学・幼児教育

キーワード： 保育者養成 4年制大学 実践知 幼児理解 歴史的検討 現場ニーズ ジェンダー観とライフワークバランス 保育者の資質・能力

1. 研究開始当初の背景

(1) 平成 23 年 7 月「子ども・子育て新システム」の中間取りまとめで、幼保一体化の制度改革が目指された。従来、保育士養成は短大・専修学校の養成校が主流であり、地方厚生局の指導調査でその質を担保してきた。平成 20 年保育所保育指針が改定され、同時に告示化された。さらに、平成 23 年度より指定保育士養成施設のカリキュラム改正が適用され、保育士養成の質の向上が図られ、従来通り各教科目の教授内容の標準的事項が示された。一方、長年安定推移してきた保育士養成課程の入学定員が、ここ数年で約 1.5 倍に急増し、中でも 4 年制大学の参入による定員増が顕著である。幼稚園教諭 1 種免許と共に保育士資格も取得する 4 年制大学での保育士養成が急増する中では、高等教育機関としての総合大学の教育体制と従来の保育士養成体制との矛盾は否めない。4 年制大学の視点から、保育士・幼稚園教諭両養成体制の整合性を図る検討が必要であろう。

(2) 養成課程では、保育者を目指す学生の質的变化に対応する必要がある。学生の学力低下、目的意識の希薄さ、コミュニケーション能力不足などが指摘されるが、特に保育者にとっては、現在の青年達の抱える 実体験・自然体験の不足と対人関係経験の不足は致命的でさえる。養成過程においてこれらの不足を補い、豊かな感性、共感性、感受性といった人間理解に関わる能力と、倫理観、使命感、向上性といった職業人としての意識に関わる能力を培うための教育内容と教育方法の構築は早急になさなければならない。

(3) 子どもを取り巻く環境の激変による保育現場の諸問題に対応できる保育者の養成が急務である。近年、家庭の養育機能が低下し、児童虐待をはじめとする家族問題の急増と複雑化、発達障害等の特別な支援を必要とする子どもの問題の顕在化、日本語を母国語としない子ども達の増加などにより、保育に対するニーズが多様化し、質が変容している。保育者には、これらに対応することのできる高度な専門性が必要とされている。

(4) 保育という営みは一瞬一瞬の子どもと保育者の生きた関わりが命であり、そこに各保育者の実践知が込められている。瞬間的な子どもへの関わりの背景には、保育者の個々の子ども理解が意識的・無意識的に存在しているのである。保育者養成は他の分野に比べて実務家教員の割合が高い分野である。実務家教員は単に自己の体験を語るに留まらず、保育者の持つ実践知を集約し、理論にまで高め、実体験の乏しい現代の学生の幼児理解につないでいく責務がある。

2. 研究の目的

本研究は保育者養成をめぐる複雑な現状を多角的にとらえ、実践知を理論化し、その教育内容と方法を構築することを目的とする。

(1) 4 年制保育者養成における問題点の歴史的・制度的検討：4 年制大学における保育者養成を検討する基盤となる現行の保育士・幼稚園教諭養成の特質とその問題点を、歴史的・制度的視点から明らかにする。

(2) 保育現場の諸課題と 4 年制保育者養成への要請の検討：現場の直面している諸問題の実態と 4 年制大学保育者養成に要請される資質・能力の構造化を行う。

(3) 実践知に根ざした幼児理解の教育内容と教育方法の検討：保育者の幼児理解に関する実践知とは何か、その具体的内容を検討、理論化する。同時に、学生達が自らの育ちの中で実体験・対人関係経験が極めて少ない状態を踏まえ、それを補いつつ幼児理解に関する力を効果的に養う方法を模索する。その際、学生の実習等での現場体験と大学での学びの往還を重視する。

3. 研究の方法

(1) 幼稚園教育が創始された明治期から保育者養成は小学校教員などの養成に比べ軽視され続けてきた。その歴史的・制度的変遷を史資料により明確にした上で、現在に至る保育者養成の理念や内容、政策遂行過程、保育者養成のカリキュラムの変遷を検討し、4 年制大学での保育者養成の特質を抽出する。

(2) 幼稚園・保育所の管理職対象の面接調査と質問紙調査により、保育現場の抱える諸問題の実態とそれに対応しうる 4 年制保育者養成への要請を収集・分析し、養成カリキュラムの編成と内容を検討する。

(3) 保育者の持つ実践知とは何か、保育者との面談と保育記録の検討から理論化を図る。また、学生が保育・教育実習、ボランティア等で保育現場を体験する中で、理論と実践の往還を実感し、それが定着していくための教育内容と教育方法の構築を、学生対象質問紙調査と授業での感想記録の検討等を縦断的に継続する中で目指す。

4. 研究成果

(1) 4 年生保育者養成における問題点の歴史的・制度的検討

まず、保育者の職場となる幼稚園の普及状況について検討した。幼稚園は、小学校教育が国の重要な政策として展開してきたことは対照的に、創始された直後は公立園が創設されたものの、その後は徐々に私立幼稚園が増加し、現在にいたるまで私立に依存している。

次に、保姆養成校については、各府県に師範学校をおき師範学校規則によって養成される小学校教員とは対照的に、戦前期において官立の保姆養成機関は東京、奈良の両女子高等師範学校の 2 校だけであった。明治初期の保姆養成機関の多くは、「各種学校」の扱いで、統一的な基準は一切設けられなかった。質の高い養成が行なわれた養成校がある一方、僅か半年程度の講習会で保姆を速成す

る養成校もみられた。そのため、保姆養成程度には一定基準のない状況が続いた。

優れた保育者の存在なくして質の高い幼児教育・保育を実践することは不可能である。第3に、資格程度に関して、戦前期は、幼稚園令により、小学校教員よりも程度の低いものとして規定されており、これが、戦後、小学校以上の教員と同様に「教諭」とされながらも実態としては短期大学中心の養成、二種免許状が主流の保育者養成の在り方を形成したと考えられる。

他方、託児所（保育所）保姆に関しては資格規定さえない状態であり、戦後に制度が作られた保姆の試験は高校卒業で受験資格が与えられてきた。

また、保姆の資格程度を向上させる際に、あわせて検討されなければならないことが待遇の問題である。戦前期の幼稚園保姆・託児所保姆の待遇に関する研究から、十分な待遇が与えられていなかったことが明らかになっている。

第4に、戦前は、幼稚園保姆免許の付与を目的とした検定試験制度があり、試験検定と無試験検定の二種類があった。試験検定は幼稚園令施行規則で尋常小学校本科正教員に準じるとされ、13科目が課されたが、このうち「保育」「手工」の二科目は保姆独自の科目であった。ここにおいても、保姆の専門性が十分に認められていたとはいえない状況であった。無試験検定とは出願者の取得資格や学歴、経歴等によって免許状を与える検定方式であった。

から述べてきた通り、日本の保育者養成は、その創始・展開の過程において、小学校本科正教員よりも低い資格として位置づけられてきた。また小学校と比して、国の文教政策の積極的な対象ではなかったことから、私立の養成校が独自の養成を行ってきたことで、教育理念に基づき質の高い養成を行う養成校と、保姆の需要を満たすことを目的とした非常に簡易な速成を行った養成校が併存してきた。それ故に、日本における保姆の養成は、資格程度の向上、養成校全体の質的向上、専門性の確立など、様々な課題を抱えながら展開してきたのである。

戦後、新たな教員免許制度が確立し、教員は大学において養成することとなった段階でも、戦前から残る小学校教員よりも一段低い資格という保育者のイメージや、待遇面の問題は引き続き課題として残されている。

（2）保育現場の諸課題と4年制保育者養成への要請の検討

保育者に要請される資質・能力の把握：まず、幼稚園・保育所経営者・園長を対象とした面接調査を実施したところ、4年制大学に対して養成課程教育内容以上の期待を持っていないことが窺えたが、様々な保育現場でのボランティア経験や挨拶、言葉遣い、文章力、報告・連絡・相談といった社会人とし

ての基本的な事柄の育成が求められていた。また、資質としては、人としての豊かさ、探求心、保護者対応等、能力としては、指導計画、理論と実践の往還、基礎技能の捉え方等が期待されていた。この結果を基に、質問紙を作成し、幼稚園・保育所の園長を対象にした全国規模の調査を実施した。30の質問項目の回答を因子分析し、「学び続ける態度」「子ども理解」「理論と実践」「素養」「把握」「経験」「常識」の7因子を抽出した。学び方や探求心を培い、学び続ける姿勢を持った保育者を育てる必要が示唆された。また、保育の専門的知識以上に、常識を含め社会人としての基礎を養う指導が求められていた。

カリキュラム再構築に向けた「体育的指導・能力」と「音楽指導・能力」の育成と課題：幼児期の身体活動・運動遊びの必要性、音楽能力を育成する時期として幼児期は重要であるとの認識を持つ保育者は多い。しかし、保育者自身が高い専門性を持っておらず、体操（スポーツ）指導や水泳指導、音楽指導に、外部指導を取り入れている園が多く、多くの矛盾が見られる。養成課程において、学生が最低限の運動遊びの提案、工夫、発展等の知識と経験、また、歌唱力、リズム感といった基本的な音楽能力をバランスよく学べるようなカリキュラムが求められている。

ここで、体育的指導は、男性保育者への期待が大きかった。他方、音楽指導では、学生の意識はピアノ実技にいきがちであるため、教員の指導の工夫が課題として残る。

保育者をめざす学生の性別役割意識・ジェンダー平等意識と現場保育者のワーク・ライフ・バランス：学生対象の「保育者とジェンダー観」調査と、首都圏の公・私立保育所の現職保育士を対象としたワーク・ライフ・バランスに関する質問紙調査を実施した。その結果、保育者養成課程男・女学生は他学科の男・女学生より性別役割意識が低いことが示された。さらに平等主義的性別割態度・ジェンダー平等意識においても、保育者養成課程男子学生は同女子学生および他学科の女子学生と差がなかった。男・女学生が卒業後、保育者として共に長く勤務することができるためには、保育者養成において、ジェンダー平等意識を育てるようなカリキュラムが求められる。次に、保育士対象の調査から、仕事と生活の悩みやストレスについて「まあ感じている」と答えた人の割合が多かった項目は、「職場の人間関係について」、「保育の内容について」、「保育士としての自分の能力について」、「給与や労働条件が悪い」、「この仕事の将来性への不安」であった。わが国のこれからの保育・子育て支援システムには、男女が仕事も子育ても共に分かち合うワーク・ライフ・バランスの実現が不可欠であり、それは保育士にも必要なことである。

（3）実践知に根ざした幼児理解の教育内容と教育方法の検討

保育者の幼児理解に関する実践知について：2つのアプローチからこれに迫った。

第一は、研究者が保育現場に入り、保育者の実践知を保育者の語りと1歳児クラス1年間の保育記録から検討した。他者とのかかわりや遊びが豊かに展開するとき、保育者がそのきっかけを創りだしていた。そのきっかけをとらえる瞬間（ひらめき）は、保育士の実践知であり、保育を楽しむ姿勢と柔軟性を土台にして生まれてくるものと考えられた。

第二は、保育経験を持つ養成校教員が、自らの実践を整理し、子ども理解について省察した。まず、教員の可能性と課題を見出す試みとして、授業分析を行なった。教員は内省的に養成校教員、元保育者、個人（プライベート）の3者で対話をしながら授業を進めている。つまり内省的トライアンギュレーションが行われていることが明示化された。次に、教員自身が保育者時代に記した保育記録を「算数・数学」という視点から分析することを試み、幼児の遊びや生活の中に隠れている「学び」について考察を行った。幼児理解とは単に幼児を理解しようとするのではなく、幼児の体験と育ちの関係について省察を繰り返し積み上げること、徐々に<その子(たち)>理解に近づくのであると考えた。

学生の幼児理解を深める授業の検討：保育場面のビデオ視聴により幼児理解を深める授業を行い、そのプロセスを検討した。学生達は、ビデオ映像から情報を取り出し、自己の記憶から取り出した情報と照らし合わせ、解釈する。さらにその解釈は自己の持つ情報となり、新たな解釈に影響を与えていくというスパイラルが示された。養成校では、授業により知識や体験を増やし深め、情報を充実させると共に、学習プロセスのスパイラルを昇り続けられるように支援することが重要である。そのためには、学生同士の話し合い、コメントペーパーのフィードバックなどの方法を使い、自分とは異質な思考に出会う機会を設けることが有効である。

学生達の幼児理解に関する成長について：2つの方法で学生達の成長を検討した。

第一は、ベテラン保育者の優れた実践報告を聴き、それをどう受け取るかを学年間で比較した。2年生から3年生へ、一見学びの姿勢が後退しているかのように見えた。2年生は形式知を蓄える時期、3年生は初めての保育所実習を終えて、保育の難しさを実感した上で、これまで蓄えてきた専門的知識との照合をしつつ、大学での学びを深めつつある戸惑い・模索の時期であると考えた。

第二は、子どもについての20答法の実施と自由記述により、子どもイメージの学年進行による変化を追った。入学時点から保育者養成課程学生は他専攻学生に比べ、子どもイメージを豊かに持ち、より肯定的であった。半年後、表面的ステレオタイプのなとらえ方から、自分の感情と離れて子どもを客観的に眺める方向へ変化し、さらに、子どもにとつ

ての行為の意味をとらえようとする兆しがみられた。卒業時点では、4回にわたる実習で複数の保育現場と多様な子ども達に出会い、さらに教育・保育両実践演習で仲間と経験を共有しつつ振り返る作業を繰り返したことにより、子どもの多面性、個性、意外性に気づき、子どもをとらえる視点が多様化し、子どもにかかわる大人のあり方への自覚が生まれていた。実習の個別体験による戸惑い・模索の時期を経て、大学での様々な学びに目を向け、「反省的实践家」への歩みを始める準備に向かっていると考えられる。

より、保育者の幼児理解に関する実践知は、大変複雑で容易に解明できる問題ではないが、研究者が保育者と共に、保育エピソードの語りと保育記録の検討を地道に積み重ねていく中で少しずつ見えてくるものである。一方、保育経験を持つ研究者が自らの保育経験を省察する中でも、実践知があぶり出されてくる。保育経験をもつ養成校教員（＝研究者）が、大学で授業をする中で、保育を行っていたときには意識下にあった実践知を取り出していく過程を検討した。これも省察の繰り返しにより、少しずつ見えてくるものであった。

より、幼児理解を深める学びは、特定の科目でなされるのではなく、同じ学生達を担当する教員同士の共通理解の下、実習を含め様々な授業の中で繰り返し取り組みられていく必要がある。また、一方的な講義やビデオの視聴で終わることなく、個々の学生が授業内容から感じたことを記述し、互いに他者の記述を読み合い、仲間同士で話し合うことにより、幼児のとらえ方の視点が広がり、深まっていくことが示された。この学生のゆっくりとした学びの深化により沿う教員の姿勢が必要であり、教員が学生達の学びの実態を把握していることも重要であろう。

（4）総括

平成27年4月より、子ども・子育て支援新制度がスタートしたが、我が国の保育制度の先行きは不透明なままである。

子どもの育つ環境の変化をみると、家庭の養育機能の低下には歯止めがかからず、子ども一人ひとりが何らかの社会・家庭のひずみの中におかれており、保育ニーズは多様化し、その質が変容してきている。その上、保育者には、親、家族に対する相談援助や地域社会の中での子育て支援までも求められており、ますます高度な専門性が必要となっている。近年、保育者養成を行う4年制大学の増加は顕著であり、学生は4年間をかけて、自己の能力や適性を見つめ、現代の複雑な保育ニーズに応え得る保育者としての専門性を形成していくことが可能である。

しかし、現在も社会の中で、保育者の専門性が正当に評価されず、待遇の改善が進んでいない現状がある。その上、保育現場でさえ、保育者には人柄の良さが重視され、

保育者養成には、保育の専門性以上に、常識を含め、人として、社会人としての基礎を養う指導が求められていることが示された。その背景に大学生の質的低下があるとは言え、現場には、真の幼児理解に基づいた子どもの将来の基礎となる体験を十分に保障できる保育を実現するために、保育者に対して高度な専門性を期待すること、園の中で専門性を高めあう同僚性を醸成していくことも求められるであろう。さらに、養成校では、入学してくる学生に学力・人間力が十分に育っていない現実を前に、まず、学生自身の育ちを支えることが必要になっている。

以上のように様々な困難はあるものの、保育者の実践知を探る中で、幼児教育・保育では、子どもが日々の生活や遊びの中で、人格の基礎を形成するに留まらず、小学校以降の全ての教科学習の基になる体験を豊かに経験することが重要であることが示された。これは小学校の教科学習を先取り「教育」することでは決してない。保育園や幼稚園で子ども達が充実した体験をするために、保育者養成では保育技術や現場ですぐに役立つ実践力の養成に留まることなく、より深く、多角的に子どもの姿をとらえ、理解する力、すなわち幼児理解の力、および、多様な子どもを含む集団の中で個々の子どもが十分な発達を遂げられるような保育を創造し実践していく力を育成することが重視されなければならない。その上、これらの力は、日々の保育の中で、絶えずブラッシュアップしていく必要があるので、日々の保育を省察し、実践知を蓄えていく保育者を育てる必要がある。

近年の保育者養成の4年制大学化は、養成の質を高めるといふ点において歓迎できる変化ではあるが、4年制大学において養成した人材が保育現場へ就職し、そこで働き、キャリアを継続し、より専門性の高い人材へと育っていくためには、学歴に見合った待遇や、継続して働くことの可能な職場環境が必要不可欠であると強調したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5件)

佐野友恵、戦前日本における託児所保姆の養成・資格・待遇 - 幼稚園保姆との比較を中心に -、保育学研究、査読有、第51巻1号、2013年、Pp.26-35

佐野友恵、幼稚園保姆試験検定に関する研究 - 幼稚園令制定後を中心に -、幼児教育史研究、査読有、第9号、2014年、Pp.33-48

佐野友恵、幼稚園保姆無試験検定に関する研究 - 幼稚園令制定以前を中心に -、乳幼

児教育学研究、査読有、第23号、2014年、Pp.35-44

芦澤清音、保育の物語と保育者の実践知 - 1歳児クラスの保育エピソードに見られる保育士と子どもの対話から実践知を探る -、帝京大学教育学部紀要、査読有、第2号、2014年、Pp.231-243

草野いづみ、角田奈津弥、保育者をめざす学生の性別役割意識・ジェンダー平等意識 - こども教育コース男女学生、他学科男女学生の比較から -、帝京大学教育学部紀要、査読有、第3号、2015年、Pp.41-48

[学会発表](計 22件)

岡田たつみ、知的相互作用による学習の場を目指して - 振り返りの視点から -、日本教育方法学会第48回大会、2012年8月、福井大学(福井県福井市)

登啓子、子どもを中心とした音楽表現活動の検討(2) - 養成校での取組み -、国際幼児教育学会第33回大会、2012年9月、函館短期大学(北海道函館市)

佐野友恵、戦前日本の保姆養成校にみる「多様性」とその影響、日本乳幼児教育学会第22回大会、2012年12月、武庫川女子大学(兵庫県西宮市)

芦澤清音、杉本真理子、岡田たつみ、保育学生の実践知の学びの検討 - 現場保育者の語りを通して -、日本保育学会第66回大会、2013年5月、中村学園大学(福岡市城南区)

浪越一喜、登啓子、保育者に求められる資質・能力の構造把握に向けて、日本保育学会第66回大会、2013年5月、中村学園大学(福岡市城南区)

岡田たつみ、保育者養成校における実務家教員の課題と可能性に関する検討 - 自らの授業を振り返って -、日本保育学会第66回大会、2013年5月、中村学園大学(福岡市城南区)

登啓子、表現活動についての学生の気づきを深める試み、日本保育学会第66回大会、2013年5月、中村学園大学(福岡市城南区)

佐野友恵、幼稚園令制定後の保姆検定試験問題にみる幼稚園保姆の資格程度、日本保育学会第66回大会、2013年5月、中村学園大学(福岡市城南区)

若谷啓子、養成校の音楽表現活動における協同的な学びについての一考察、国際幼児

教育学会第34回大会、2013年9月、東京福祉大学(群馬県伊勢崎市)

佐野友恵、幼稚園令制定後の幼稚園保姆検定試験問題の検討 - 実技試験に焦点をあてて -、日本乳幼児教育学会第23回大会、2013年11月、千葉大学(千葉県千葉市)

杉本真理子、岡田たつみ、保育者養成課程学生の子どものイメージの変化の検討 - 保育者養成課程新入生と上級生の比較による -、日本保育学会第67回大会、2014年5月、大阪総合保育大学(大阪市東住吉区)

浪越一喜、若谷啓子、保育者に求められる資質・能力の構造把握に向けて その2、日本保育学会第67回大会、2014年5月、大阪総合保育大学(大阪市東住吉区)

岡田たつみ、保育者養成校における算数科授業の考え方と実践、日本保育学会第67回大会、2014年5月、大阪総合保育大学(大阪市東住吉区)

若谷啓子、歌唱活動における保育者の支援についての一考察、日本保育学会第67回大会、2014年5月、大阪総合保育大学(大阪市東住吉区)

佐野友恵、幼稚園保姆検定における無試験検定の認可校に関する考察、日本保育学会第67回大会、2014年5月、大阪総合保育大学(大阪市東住吉区)

佐野友恵、戦前日本における幼稚園の府県別設置状況の推移 - 設置主体の割合を中心に -、日本子ども社会学会第21回大会、2014年6月、敬愛大学(千葉県稲毛区)

岡田たつみ、保育の場における算数との出会いに関する検討、日本乳幼児教育学会第24回大会、2014年11月、広島大学(広島県東広島市)

佐野友恵、幼稚園保姆検定の府県別検定人員 - 幼稚園令制定以後を中心に -、日本乳幼児教育学会第24回大会、2014年11月、広島大学(広島県東広島市)

杉本真理子、芦澤清音、保育者養成課程学生の子どものイメージの変化の検討(その2) - 4年終了時点での検討 -、日本保育学会第68回大会、2015年5月、椋山女学園大学(名古屋市千種区)

芦澤清音、1、2歳児の育ち合い - ぶつ

かり合いの場面に注目して -、日本保育学会第68回大会、2015年5月、椋山女学園大学(名古屋市千種区)

②草野いづみ、保育者のワーク・ライフ・バランスとジェンダー観、日本保育学会第68回大会、2015年5月、椋山女学園大学(名古屋市千種区)

②岡田たつみ、養成校における科目(算数科)授業についての検討、日本保育学会第68回大会、2015年5月、椋山女学園大学(名古屋市千種区)

〔図書〕(計 1件)

芦澤清音、ひとなる書房、1、2歳児の自己肯定感の土台を育む - 泣いて笑って育ち合う16人の物語 -、2015年、224ページ

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

取得状況(計 0件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

杉本 真理子 (SUGIMOTO, Mariko)

帝京大学・教育学部・教授

研究者番号: 70130010

(2) 研究分担者

芦澤 清音 (ASIZAWA, Kiyone)

帝京大学・教育学部・教授

研究者番号: 20459382

草野 いづみ (KUSANO, Izumi)

帝京大学・教育学部・教授

研究者番号: 40384797

浪越 一喜 (NAMIKOSI, Ituki)

帝京大学・教育学部・教授

研究者番号: 10228083

岡田 たつみ (OKADA, Tatumi)

帝京大学・教育学部・準教授

研究者番号: 70566249

若谷(登) 啓子 (WAKAYA, Keiko)

帝京大学・教育学部・準教授

研究者番号: 50389889

佐野 友恵 (SANO, Tomoe)

武庫川女子大学・文学部・講師

研究者番号: 70413408